

左の記事が読むにあたいする記事であるかどうかは、読む人それぞれによって判断は異なることだろうが、転載する方は、もろん、読者にあたりすぎるものだと考えてい

る。読み方として、インテリさんだからこそというものもあると思うが、肉体労働者の「ワーカーズ・コレクティブ」の例もある。よ

それぞれの椅子

何のためにおれはあくせく働いているのだろう。

サラリーマンなら一度は心の中でこうつぶやいたことがあるだろう。自分のため。家族のため。答えはいろいろ考えられよう。が、自分の仕事は社会の中で何か意味があるのか、と再び問えば、

「プレスオールターナティブ(略称PA)」という株式会社の登記上の「社長」。東京都目黒区三田二丁目の小さなマンションの一階に、事務所と店舗、階上の別室に自宅がある。

市民事業

店舗の窓には白地に青の字で「第三世界ショップ」。インドの刺しゅう、フィリピンのプレスレット、ブラジルの指輪、有機・無農薬コーヒー、シンバプエのチョコレートなどが雑然と置いてある。

世界各地の障害者や少数民族、女性の自立運動組織が作った製品を直接輸入し、売っている。相手の国や、地域にさややかながら仕事を作りたい、貿易援助だ。

社会に役立つ幸福

ど。いわば、市民運動をそのまま会社にしたような「市民事業」だ。経営方針は「社会性・個性・経済性を満足させる」。年商約一億円にまで成長した。

片岡さんも含め社員は十三人、横の関係だ。非常勤の「志スタッフ」と呼ぶ四人を入れた十七人全員が五万円から三百六十万円の株を持っている。「ワーカーズ・コレクティブ」と呼ばれる形態の一例だ。共同出資した組合員が、経営者であり、労働に従事して、報酬を得る方法である。PA社は内部では各セクションごとの独立採算制だが、給料は一律十五万円。

片岡さんは三菱信託銀行に十六年間勤め、昭和五十九年夏に辞めた。課長補佐だった。辞表を出す二日前、妻の幸子さん(30)に相談した。

「やめようかと思う」「やめれば」。銀座で生花店を経営している幸子さんは、驚かなかった。かつて銀行で同僚。彼が、市川房枝さんらの選挙の支援運動をしたり、従業員組合の委員長をしたりしてきたことを見て来た。いずれはやるだろうな、とも思っていた。

勝さんは、六十年になると市民運動を始めた。市民運動や生活に的を絞った海外の情報を翻訳したり、学生ら若い仲間と勉強会をしたり。学生の就職が間近になったころ、この活動を続けて、会社にするかどうかで議論。「意味のあることで、食えないはずがない」と十二月に会社にした。

幸子さんもPAのスタッフの一人。勝さんを「銀行員時代より、生き生きしている」と見る。

そのはずだ。入行直後から時間や規制にしばられるのが合わなかった。やめたあとでも遅刻した夢を見て、はっと飛び起きたことがあるほど。それに、こんな光景も思い出す。十年ほど前、労使の意見交換の場で若い実行委員が「利益をあげても、自分の生活と結びつかない。何のために稼いでいるかわからない」といった。会社側の説明は「社員の家族が食べに行くためなんだよ」。質問者も、勝さんも納得できなかった。

結局、十六年間いって何が見えてしまった。一つ一つの階段を上って、たとえ役員になって、子会社の社長になっても……。じゃせん、ニンジンを目前にする

された馬のように走っているだけで、だれかに追いたたられ、だれかに決められる。そんな「ニンジン」の原理が。

「生きがいと収入」を求める市民事業が、ワーカーズ・コレクティブの形などで各地に生まれている。全国で約三百という。PA社はこの四月、東京の信用組合と共同して「市民バンク」を作った。そうした企業に融資する「市民起業ローン」を始めるためだ。すでに二件に四百万円と、六百万円を融資した。

当番制で作る昼食を前に若い仲間と雑談する片岡さん(右端) 東京都目黒区のプレスオールターナティブ(撮影・松尾 順造)



当番制で作る昼食を前に若い仲間と雑談する片岡さん(右端) 東京都目黒区のプレスオールターナティブ(撮影・松尾 順造)